

Technical & Safety Tips

ヒヤリ・ハット事例から学ぶ シリーズ(1)

ヒヤリ・ハット事例とは？

(2008年9月)

医療従事者向け WEB マガジン int

先般、財団法人日本医療機能評価機構(JCQHC)より、医療事故情報収集事業平成 19 年年報が公開されました。これによると、対象期間中のヒヤリ・ハット事例は全国の 240 病院から、20 万 9216 件*1 が報告され、また、医療事故についても、273 病院から 1266 件が報告されたとのことです。これら報告事例は、まさに実際に発生した実例、リアルな体験ですから、ここから学ぶことは多くあります。医療事故防止と医療安全の推進のため、本コーナーでは今回よりシリーズで、人工呼吸器等に関する具体的事例紹介や発生の傾向などをお届けいたします。

(*1: 定点医療機関 240 施設より寄せられた全般コード化情報)

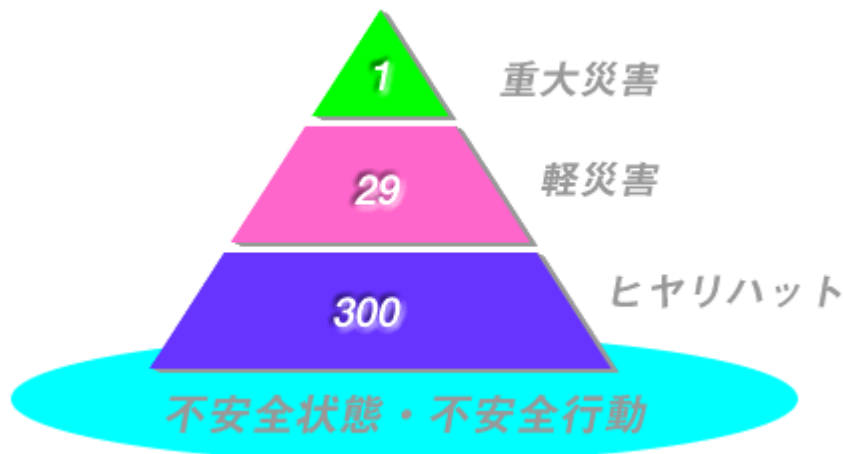
「ヒヤリ・ハット」の定義

ヒヤリ・ハットとは、まさに字の如く、“ヒヤリ”としたり、“ハツ”としたりするような経験で、重大な災害や事故には至らないものの、直結してもおかしくない事例をいいます。医療分野におけるヒヤリ・ハットについては、厚生労働省から発表されている「リスクマネジメントマニュアル作成指針」の中に、「用語の定義」として、以下示されています。

患者に被害を及ぼすことはなかったが、日常診療の現場で、“ヒヤリ”としたり、“ハツ”とした経験を有する事例。具体的には、ある医療行為が、(1)患者には実施されなかったが、仮に実施されたとすれば、何らかの被害が予測される場合、(2)患者には実施されたが、結果的に被害がなく、またその後の観察も不要であった場合等を指す。

重大事故の背景としてのヒヤリ・ハット ～ハインリッヒの法則～

「ハインリッヒの法則」をご存知でしょうか？これは、米国のハーバート・ウィリアム・ハインリッヒ氏が労働災害の発生確率の分析したものです。1 件の重大災害の裏には、29 件のかすり傷程度の軽災害があり、その裏には災害はないがヒヤとした 300 件の体験がある。さらに、幾千件もの「不安全行動」や「不安全状態」が存在しているというもので、「1:29:300 の法則」とも呼ばれています。これは、産業界のみならず、医療界でも広く浸透している考え方です。



ヒヤリ・ハット事例から学ぶ重要性

ハインリッヒ氏は「労働災害全体の 98%は予防可能である」と指摘しています。軽災害をなくせば、重大災害もなくなります。ヒヤリ・ハットをなくせば、軽災害もなくなります。不安全状態、行動をなくせば、ヒヤリ・ハットもなくなります。300 件のヒヤリ・ハットを分析、原因を探り対策をとること、つまりその背景にある、「不安全行動」や「不安全状態」を取り除くことが、1 件の重大災害、29 件の軽災害を未然に防ぐことに繋がるのです。人命にかかわる重大事故を防ぐには、日ごろのささいな取り組みが不可欠ということに他なりません。

(終わり)

医療従事者向け WEB マガジン int (2008 年 9 月掲載)